

パークの都市理論と都市認識

村 山 研 一

1. はじめに

ロバート・E・パークをリーダーとするいわゆるシカゴ学派の人々が、1920年代から30年代にかけて展開した諸研究が、いかに生産的なものであったかは、今日、周知の事実である。彼らの生産性は、単に社会学史的観点から興味のある事実であるというだけでなく、社会学的にも興味のある事実である。⁽¹⁾ このような集団の生産性は、もちろんのこと、集団を構成する人々の能力にのみ帰されるわけではない。パークのリーダーシップやシカゴ大学という制度体の持つ特質は、彼らの研究を進展させた重要な主体的条件である。そして、シカゴという都市に客体的な条件を求めることができるだろう。彼らの業績は、シカゴの成長とそこから生まれてくる都市問題についての客観的認識と理論化という作業から生まれたものであった。このような諸条件の下に生まれた彼らの研究業績は、古典として、今日、社会学史的な位置づけが与えられている。ところで、これらの業績を振り返って見る時、我々を困惑させる問題がある。我々は、一方に参与観察法を中心軸とした一連の経験的調査を目にする。他方、シカゴ学派の都市研究の理論・方法として「人間生態学 human ecology」なるものを我々は所有している。しかし、これらの調査を「人間生態学」の枠組の中に組み入れることは困難であるように思われる。⁽²⁾ 同時に、この両者が同一の研究集団による共同作業の中から生まれたのであることも、疑い得ぬ事実である。

この両者を結びつける視点を作り上げることが本稿の課題である。それを仮に「都市認識」と呼んでおきたい。都市認識とは、彼らが都市という状況をどのようにとらえ、それをどのように問題構成していたか、ということに他ならない。シカゴ学派の経験的調査も理論も、いずれも彼らが共通に所有していた都市認識から生まれ出たものである。一般に人間生態学と呼ばれる都市社会学の理論は、どのような都市認識の中に位置づけられるのであろうか。以下の議論では、パークの都市社会学関係の論文を素材とし、彼の「理論」を内在的に検討するという作業を通して、その背後に存在している都市認識を明らかにしてゆきたい。

2. community と society

パークが都市を社会学的に分析する時に、その分析枠組を構成する基礎になっているのが、community と society⁽³⁾ の二分法であるとしばしば指摘される。この二分法は「社会組織の研究を単純化し、それをもっと分析しやすくする論理を発展させる」⁽⁴⁾ ための基盤を作ったのだと考えることができる。あるいは、都市についての多様な視点が、この二つの概念の対置によってここにつなぎ合わされ、体系的な図式が構築されたとも考えることができるであ

ろう。それでは、この二分法図式はどのような論理によって構成されているのか。ここでまず我々は、彼の二分法図式の構造を説明するために、図式の形式の段階を、簡単におさえておきたい。

1916年に発表された、都市社会学のプログラムの論文、“The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment”の冒頭で彼は次のような問題提起をしている。「都市は、諸個人や社会的諸施設の集合以上のものである。……都市はむしろ、精神の状態 (a state of mind) である。」⁽⁶⁾ これは彼の原問題意識であり、彼の都市社会学的論文を貫く動機となっている。都市を、物理的・地理的秩序と道徳的・文化的秩序という二つの次元に分割し、この両次元を関連づけることが、彼のプログラムの課題となっている。

当初の問題意識は、第二段階になって、community と society の対立として展開されてゆく。⁽⁶⁾ 1921年に出版されたパーヴェスとの共著 *Introduction to the Science of Sociology*⁽⁷⁾ は、二分法図式形成の上で、二つの注目すべき論点を含んでいる。第一に、この本の中で、はじめて society と community が、意識的に区別して使われている。community という用語は、「社会や社会集団が、それを構成している諸個人や諸制度の地理的分布という観点から考察される時、適用される。」これに対して、society については、「より抽象的・包括的な用語である」と曖昧な定義にとどまっている。⁽⁸⁾ この二つの用語は区別されているが、しかし、明確に対立し合う対概念としては純化されていない。すなわち、同一実態の二つの側面を抽象化する分析用具としての位置づけがまだ明確になっていない。第二に、彼は、スペンサーとコントによる二種類の社会有機体論の検討を通して、個人と社会をつなぐ二つの過程を導き出してくる。前者が提出するのは、道具としての社会というイメージである。社会とは個人有機体の延長であり、個人的な生命活動の手段である。諸個人の関係は相互に外的であり、「競争 (competition)」という過程によって相互に結びつけられている。これに対して、後者から引き出されてくるのは、集合的生活体としての社会というイメージである。ここでは、諸個人は内的に結合しあっている。これは、本能や群居性・模倣などの要因によってしばしば説明されてきたが、パークによれば、人間社会においてはコミュニケーションを媒介にして成立する合意 (consensus) がこの状態を成立させる。ここに、「競争」と「コミュニケーション」が、相対立する二つの基本的な社会的相互作用の過程として指摘されていることに注意する必要があるだろう。

ところで、この二つの論点は、この段階では明確にかみ合っているわけではない。第二の論点は、社会 (society) の二つの側面について述べたものである。ことに對し、community と society の対は、合一実体の二つの側面を抽象したものというよりは、合一実体を二つの異なった水準で抽象化した用語である。それゆえ、「あらゆる community は society であるが、しかし、あらゆる society が community であるわけではない。」⁽⁹⁾ したがって、二つの論点は、まったく異なった次元の問題であると結論しても良さそうである。しかしながら、この両者を同一視するような記述も見られる。⁽¹⁰⁾ このように、この二つの論点の関連に関しては、記述がきわめて曖昧である。この両者は、1920年代末になって、はじめて一つの図式への収斂してゆく。ここに、community と society の両概念は、都市社会を構成する二つの側面、二つの過程として、明確に対立させられる。⁽¹¹⁾

これに対して、1930年代を、二分法図式形成の第三段階すなわち完成段階として考えるこ

とができるだろう。この段階においては、community と society の二分法は、生態学的諸用語によって整理され、装備される。二分法図式の生態学的展開は、二つの側面に分けてとらえることが可能であろう。第一は、方法の側面である。これは具体的には、自然科学的方法・統計的手法を社会学の内部に持ち込むことを意味する。その一例として、傾度分析 (gradient analysis) の手法の導入をあげることができる。⁴⁴ 第二は、理論の側面であるこれは、community の形成・変動のプロセスが、生態学的諸概念の導入によって、規則的・普遍的な自然法則としてとらえられるようになったことを意味する。例えば、支配 (dominance) と遷移 (succession) を特に重要な用語としてあげることができるだろう。⁴⁵

以上のように、大まかにいって三つの段階を経て、パークの二分法図式は完成をみたと考えることができる。この三つの段階は、二分法図式を構成する三つの視点をそれぞれ代表している。この三つの概念、三つの方法をくり返して述べるならば、次のようにまとめることができる。1. 原問題意識 (物理的・地理的秩序と、文化的・社会的秩序の対比)、2. 社会学的展開 (競争とコミュニケーションという、二つの社会過程の対比)、3. 生態学的完成 (通生物的過程と人間個有の過程の対比)。各々の段階は、先行する段階を統合し再編成することによって成立した。それゆえ、先行する段階の視点を、自らのうちに統合している。ここで、以上のような発展の段階を念頭に置いて、二分法図式を、完成された姿において、まとめよう。⁴⁶

まず、community とは空間的・地理的含意を持つ用語である。それ故、society という用語が、人間社会を、社会集団として、社会的な組織として扱うのに対し、community という用語は、人口集団として、物的・空間的な組織として扱う。第二に、community において働く基本的な相互作用過程は競争であるが、これに対し、society において働く過程は競争を制限する。より具体的に述べるならばコミュニケーションの過程である。競争は、経済的相互依存関係・分業組織などの経済的諸関係を産み出すが、これらの諸関係はすべて community のカテゴリーに含められる。村や町や都市は (そして全世界までもが) 「財とサービスの交換を通じて、共通の生活を営むと見なしうる限りにおいて」⁴⁷ community のカテゴリーに含められる。これに対して、コミュニケーションの過程を経て形成される集合的行為 (collective action) の主体が、society である。人々を内的に結合させ、共通の目的に向けて動かしてゆくのが、society の機能である。具体的には、政治的・文化的組織が society のカテゴリーの中にも含められる。さらに、community とは、動物や植物の community とも共通であるような組織である。すなわち、community を形成しているのは、生物的 (biotic)・前社会的 (subsocial) なプロセスである。これに対して、society とは、人間という種に独自の組織であり、文化的なプロセスが society を形成する。community は通生物的な組織であるが、society は人間に特有なものである。このような組織化の水準の差異は、パークによって、共生 (symbiosis) と合意 (consensus) の対比としてとらえられている。同時にこれを、構成単位の水準でとらえる時、個体 (individual) と人格 (person) の対立として考えられる。以上のような対比から、方法論的な含意が引き出されてくる。community とは具体的であり可視的であるような対象である。それ故、community は、自然科学的・統計的取り扱いが容易である。それゆえ、「社会学的調査は、community から始めるのが適切」⁴⁸ となる。また、ここから、生態学的方法と社会心理学的方法の対比が導き出されてくる。

最後に、community と society が、二分法図式の中で語られる限り、決して両者は実体的に別のものを指示しているわけではないことを、付け加えておく必要があるだろう。「あらゆる community はある意味で、そしてある程度は、society である。」⁴⁰ この両者の区別はきわめて分析的なものである。

パークの二分法図式は、都市社会という混沌とした対象を、二つの側面・二つの構造へと単純化して再構成する。このような単純化は、対象への接近を容易にし、分析を容易にする。人間生態学は、人間のコミュニティを、動植物のコミュニティとの類推によって、単純化して把握ることにより成功をおさめたと考えることができる。しかし、単純化が、多くの側面の捨象であることは言うまでもない。ここで我々は、二分法図式を検討し、その限界と、この図式にこめられた様々なアイディアの持つ潜勢力を再考してみたい。

3. 二分法図式の批判的検討

パークの二分法図式に対しては、過度の図式的単純化によって生まれてくる諸矛盾点がしばしば指摘される。⁴¹ この矛盾点は二つのものに大別して考えることができる。第一は、community と society の対概念が、単に分析用具として考えられるに止まらず、実体的概念としても考えられてしまうことに由来する矛盾である。すなわち、community と society という二つの側面によって構成されている対象が、やはり community (もしくは society) と呼ばれることから生じる混乱である。⁴² 第二は、分析的図式のもつ不整合性という問題である。これは、二分法図式に内在的な問題である。後者については、さらに次のような問題が関連してくる。彼は二分法図式によって都市を分析する一方で、生態学的組織・経済的組織・政治的組織・文化的組織より構成される四重図式を提出している。この二つの図式はいかなる論理的関係にあるのか。ここでは、図式の論理的整合性の問題を中心にして議論を展開してゆこう。

二分法図式は、先に触れたように、三つの視点が統合されることによって形成されたものである。ここでまず、各々の視点とその相互連関について検討してみよう。

第一の視点は、地域性・空間性という要因に関連したものであり、都市という対象が、一方では空間的・物理的・地理的な布置構造として(すなわち、人および制度の空間的分布構造として)、他方では社会関係のシステムとして、あるいは文化的世界として、この二つの側面でとらえられている。後の議論との関係で、とりあえずは、この二つの側面を、生態学的組織と社会的組織と名づけておきたい。このような視点は社会学に対して、都市という地域社会の地域性・空間性を、すなわち地域を物的なシステムとして正当に理論化することを要請していると考えられることができる。

第二の視点と第三の視点は、きわめて似かよっているが、しかし、区別して考えるべきであろう。前者は、社会的な相互作用過程という領域内での対比である。競争とコミュニケーションという二つの過程から、共生と合意という二つの関係が生まれ、両者は最終的には、経済と政治・文化の対立へと構造化されてゆく。これに対して、第三の視点では、経済的な意味での競争が、生態学的に一般化して解釈されている。競争とコミュニケーションの対比は、社会的相互作用内部の問題ではなくなり、前社会的(subsocial)過程と社会的過程の対比として解釈される。ここでは、競争というプロセスは、生物個体間の自然過程としての生

存競争へと拡張解釈される。それゆえ、経済的過程とは通生物的な過程である。このような生態学的な対比の仕方は、一方に通生物的なものと、他方に人間個有なものとを区別する。前者には、生態学的組織と経済組織が含まれ、後者には、政治組織・文化組織が含まれる。

パークの二分法図式は、この三つの視点が事実上収束するという前提の上に成立する。これは、分析のモデルを植物コミュニティにとることにより可能となったように見える。植物は内的な空間・心的な空間を持たない。それゆえに、個と個、種と種の関係は完全に外的であり、植物のコミュニティ(分布構造)はこのような外的過程により成立するコミュニティの典型としての位置を与えられる。このようにして植物コミュニティの類比のもとに community, 競争, 汎生物的過程, この三つが等置される。逆に、人間の社会における余剰の部分が society というカテゴリーを構成する。ここで、この等置関係の妥当性を検証する必要があるだろう。

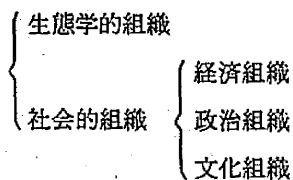
まず、第二の視点と第三の視点について検討を加えてみたい。この両視点の接点となっているのは経済の領域であるが、この領域はパークの図式の中では両義的な位置づけを与えられているように思える。パークの図式において、経済領域は二重の意義を持つ。第一には、市場における自由競争の過程であり、第二にはその結果生まれてくる分業組織である。先に触れたように、市場における競争は、より一般的な生物個体間の生存競争というカテゴリーへと包摂される。それゆえ、分業組織もまた society とは対立する生態学的組織としてとらえられているように思える。⁴⁴ すなわち、経済領域一般が生態学的領域の中に包摂される。ところが、次のような表現も提出される。「競争が一種の秩序を作り上げるところに society が存在すると言うことができるだろう。……このような領域において、外在的・機械的秩序にかわって、内在的・機能的な社会秩序が形成される。これは、人間の本源的関係が、ホップスが記述するように、万人の万人に対する闘いであるということではなく、むしろ、競争の機能と効果は、いたるところに分業を産み出し、これが競争を減少させる。」⁴⁵ ここでは、society 自体が競争の所産と考えられており、分業組織は、community と society を媒介する位置を与えられている。我々は、経済領域が生態学的空間と社会的空間との接点となるが故に、図式の整合性が破綻を見せていることを理解する。

パークも、同時代の多くの社会学者と同様に、進化論的・有機体論的な思考の影響を強く受けていた。しかし、彼がとったモデルは、社会を個的な生物有機体と類推するものではなく、生物の「社会」との類推によって語るものであった。しかし、この両者は、単に類推の関係を越えていったように見える。すなわち人間の community も生物の community も、競争という同一の過程により産み出された同一存在として語られる。しかし市場という場における競争を生物間の生存競争へと解消しうるだろうか。彼はこの問題を次のように解決する。「生態学とは『経済学を全生命界へと拡張したものである。』」⁴⁶ ここではそれまでの議論とは逆に、経済原則が生態学の世界へと拡大されている。しかし、市場経済と生態学的経済の同一性・非同源性という問題は依然として残されている。例えば、生態学的概念としての競争は「無意識的」⁴⁷ な過程であるが、市場における競争が目的合理的な計算を必要とするものであることは言うまでもないだろう。この両者が同一視される時、市場経済のもつ社会的意味は見失われ、経済は生命の代謝過程へと還元されてしまう。したがって、人間社会の競争過程および経済組織を生態学的に汎生物的に理論化する試みは、人間社会における経済行動を本能的なものへと押し戻すという結果を生み出すことになる。

以上の議論が第一の視点とどのようにつながってくるのであろうか。この問題に関しては、次のような二つの命題を検討してみる必要がある。1. 人間社会の生態学的組織は、生物の生態学的組織を構成するのと同一原理によって構成されている。2. 人間社会の生態学的組織は経済的競争によって決定される。まず、第一の命題について。これは、動植物の community が個体間および種と種との生存競争によって決定されるということ、いいかえれば生存競争によって生じた均衡状態として把握されること、そして、人間の community も同様に把握されることを意味する。この命題、次の二つの条件のいずれかが満たされる時、妥当なものといえる。第一は、人間社会においても、生物のコミュニティに共通する生物的な過程が見出されること。すなわち、生物的な過程の存在を事実として検証すること。しかし、これは実現しなかった。⁶⁴ 第二は、たとえ事実として検証し得なくても、図式内において有意な仮説であること。しかし、この仮説がどのような混乱を招いたかは、以上で議論した通りである。「生態学的」という用語は、パークの場合、個体および施設の空間的分布という意味あいと、前社会的・生物学的という意味あいを持っていたが、後者は、結局、誤まった前提の上に図式を作り上げるゆえに放棄されるべきであろう。⁶⁵

競争という用語から生態学的意味を排除して、経済的な意味にこの用語を限定した時に、第二の命題が導き出される。したがって、都市の生態学的パターンを決定する独自の「生態学的」過程（生物学的・前社会的という意味での）を仮定する必要はない。自然的条件が、経済的過程に組み入れられ、経済原則に従い解釈されることによって、はじめて生態学的組織が成立する。⁶⁶ しかし、都市の生態学的組織を決定する要因を経済的な要因にのみ求める考え方に対しては、いくつかの批判が提出されているように、考慮の余地がある。⁶⁷ ここでは次のように修正しておくべきであろう。都市の生態学的組織は、経済をはじめとする社会的諸過程によって決定される。しかしながら、近現代の都市においては、経済的過程がもっとも重要である。すなわち、生態学的組織は、一般的には、三つの社会的相互作用過程の総和の結果として形成される。この形成過程は、一連の自然史的過程をたどり、生態学的諸概念との類推によって語ることも可能になる。しかしながら、それはあくまでも類推にすぎない。

最後に生態学的組織と社会的組織の関連を四重構造の図式との関わりにおいてまとめておく必要がある。上記の議論の中で、我々は、四重の構造を、生態学的組織と社会的組織（経済・政治・文化）の二つに大別して考えた。四重構造の図式は、第一および第二の視点からは、次のように整理することができるだろう。⁶⁸



後者に属する三つの組織はそれぞれ三つの異なった水準の社会過程により構成されている⁶⁹。他方、生態学的組織は何か固有の生物学的・社会的過程により構成されているわけではない。しかし、社会的組織とはまったく異なる存在というわけでもない。それは、社会的組織が自然環境に適応することによってとるパターンである。すなわち、社会的制度（communal institution）が、「多少なりとも、明確な、かつ、特有の分布」⁷⁰をとることによって形成された組織である。しかし、同時に、個体の分布という物的・数量的特徴を抽象化することによ

って成立する概念である。すなわち、社会的組織を構成している社会的諸過程を捨象することによって成立している概念である。生態学的組織は、具体的な（そのまま数量化する）諸変数によって成立している。しかし、これらの具体的諸変数が、ただちに社会的意味を持つわけではない。生態学的組織は社会的諸過程によって成立するが、同時に社会的組織を構成するための基盤となる。それゆえ、都市の社会的構造を説明するための解き口となるのである。

本節での議論をまとめてみよう。1. 生物的・前社会的な過程なるものが存在し、この過程が community の構造を決定するという仮説は放棄すべきである。2. 競争という概念は汎生物的過程としてではなく社会過程としてとらえられるべきである。競争とコミュニケーションは、都市社会を組織化する二つの対照的な基礎過程としてとらえられる。3. 生態学的組織とは、都市の社会的組織が、自己を物理的平面へと投影した姿である。それゆえ、都市社会を研究するための客観的解き口という意義を持つ。二分法図式をこのように解釈した上で、パークの都市理論を再構成すること、これが、次節以下の課題となる。

4. 人間生態学の方法

community と society の対比は、先に触れたようにもう一つの意義を持っている。すなわち方法的な意義である。society がきわめて抽象的な存在であるのに対して、community は具体的であり、可視的である。⁸⁰ 言いかえるならば、community は、地理的分布・人口構成といった具体的・数量的な指標によって表現しうる。このような方法論の側面においては、二元的対比は、前で述べたように、生態学的方法と社会心理学的方法の対比として構成された。この時、生態学的方法は、その取り扱う側面が具体的・可視的であるが故に、順序的な優先性をもつ。それでは、生態学的方法が都市社会の社会学的研究という構図の中でどのような意義を持つのか。

人間生態学とは、人間社会の空間的・地理的分布構造がどのように決定されるのかを説明するための理論および方法である。パークの図式の中には、さらに、これが生物的過程によって決定されるという考え方がこれに付加されているが、これがどのような問題にぶつかるかは前に述べた通りである。⁸¹ 個有の生態学的過程が生態学的組織を決定存在するわけではない。むしろ問題は、生態学的構造と社会的諸過程の相互的関連であり、生態学的組織と社会的組織の相互作用という枠組の中で考えられるべきである。生態学的分析が成立するためには、1. 空間（土地）、2. 諸個体の集合（人口集団）、この二つの要素が必要である。言い換えれば、限られた空間の中で土地がどのように利用されているのか、人口集団がどのような分布パターンを示しているのか、それはどのような社会的過程によって決定されてくるのか、これが生態学的研究の主題である。

パークの定式化においては、この二つの要素に対して次のような前提が用意されている。第一に、空間とは、分布を可能にする場であると同時に、分布を制限しそれに抵抗を加える障害でもある。「空間と位置選定活動 (location) の唯一の関係は、障害と費用の関係である。」⁸² 第二に、人口集団を構成する諸個体は、競争原則に沿って行動する。この原則は、個体の移動に対し何の制限も加えられないという条件の下で成立する。すなわち、都市社会における移動性の高さが、都市における分布パターン形成の条件となる。このような個体の

「位置選定活動は、主として経済的な要因、『財政的』動因によって決定される。」⁹⁰

このように、都市の生態学的構造は、経済モデルによって説明される。すなわち、生態学的パターンを決定するのは、経済的な意味での競争である。経済モデルの使用は、さらに、方法論的に次のような意味を持つ。生態学的組織を構成する単位となる主体は、競争の過程の中で自己を手段化しなければならない。このような人間主体は、生態学的組織の中では個体としてあらわれてくる。これは同時に、生態学的パターンが、一種の自然法則として現われてくることを意味する。このような前提の下で、自然科学的方法・統計的手法を導入することが可能になる。すなわち、単位の斉一性・不変性という前提と、単位間の相互作用過程の一般性の前提という二つのものによって、生態学的世界は、一種の物理的世界として考えることが可能となり、数学的・統計的取扱いへの道が開かれてくる。⁹¹

このような生態学的方法が、都市社会の研究にとってどのような意味を持つとパークは考えていたのか。まず第一に、物理的・統計的数値が、そのまま社会的な意味を持つわけではない。しかしながら、前者は後者の指標となり得る。それは、社会的諸過程が生態学的構造を形成すると同時に、生態学的構造が社会的諸構造の基盤となっているからである。たとえば、物理的距離は社会的距離と同一のものではないが、しかし社会的距離は物理的距離となって現われることもあるが故に、後者は前者の指標となるのである。ここで我々は、この両者の関係をさらに厳密に解明してゆくための媒介を必要とする。パークにおいては、自然地域 (natural area) の概念がこの媒介としての機能を果たしているように見える。これについては、後で検討を加えよう。

第二に、人間生態学的方法は(あるいは、統計的手法は)、人間主体を個体として、すなわち『もの』として環元してとらえるが、ここに社会学における数量的方法の限界が存在する。この場合、個体とは、前で述べたように、不変であり斉一的であるような実体である。しかし、society を構成する主体は人格 (person) である。人格はコミュニケーション過程の中であって、常に変化をとげてゆく。それゆえ単位とは成り切らない。⁹²ここに、生態学的方法に対する、社会心理学的方法の成立根拠が明らかにされる。

以上のような方法論を対比する図式は、今日のみから見るならばいくつかの疑問点・問題点を含んでいる。たとえば、彼は、統計的手法を物理的世界に固有な方法と考えている。それ故、社会的諸属性や心理学的諸変数を測定する可能性についても一切無視している。こういった考え方は、すでにパークの時代でも、時代遅れのものとなりつつあったと考えられるが、しかし、我々はこのような観点からする批判を差し控えておきたい。重要なことは、二つの方法が対立する地点を明確にしておくことである。パークが、心理学・社会心理学という時、我々は専門化された個別科学としての心理学を念頭に置く必要はない。すなわち、デューイからミードへと流れるアメリカのプラグマティズムの伝統の中に、彼自身が身を置いていることを了解しておけば良いだろう。⁹³社会心理学的方法とは、人間主体を人格として取り扱う方法である。すなわち、数量的な方法に対する質的な方法である。パークは、文化領域の研究を、あるところでは社会心理学に、別なところでは文化人類学や社会学の領域に含めているが、⁹⁴心理学的方法を上記のように広義に解釈すれば、必ずしも矛盾するわけではない。

この二つの方法は、具体的にはどのように展開していったのか。ここで、パークより始まるシカゴ学派の都市研究を系譜的に眺めるならば、次のようにまとめることができるだろう。

第一には、人間生態学的方法は、人間生態学プロパーの研究領域を開拓していった。その最初の理論的成果としてあげられるのが、パーヴェスの同心円理論である。⁴³そして、一連の人口学的・形態学的研究の流れがこれに属する。この流れは、Local Community Fact Book⁴⁴をはじめとする統計的資料の整備、オグバーンなどによる統計的手法の開発、という形で研究が蓄積されていった。しかしながら、パーク自身はこのような洗練化に対しては批判的な姿勢を保持していたように思われる。⁴⁵

第二の社会心理学的研究方法は、シカゴの推移地帯 (the zone in transition) をフィールドとする一連のモノグラフという形で、実際に経験的研究を展開していった。すなわち、パーク指導の下に、多くの(当時は大学院生であった)弟子たちによって行われた、自然地域の人間行動に関する研究である。⁴⁶また、これ以前に、トマスとズナニエツキによって手がけられた研究を、一つの原型として考えることが可能であろう。⁴⁷パークの二分法図式にあてはめるならば、これらは、community ではなくて society に関する研究である。これらの研究は記述的であり、方法としては、参与観察法や、個人的記録・生活史的資料の分析という形で展開していったと考えることができる。パークの姿勢は、第二の研究方法へ傾いていたと考えることができるだろう。

パークはしばしば人間生態学の創始者であると言われることがある。たしかに、彼は人間生態学を理論化した。しかし、彼の人間生態学に対する態度には、両義的なものが存在していることも事実である。彼の都市把握の原点に立ち戻って考えるならば、都市は単なる生態学的構造を越えた精神でもあった。それ故、人間生態学とは都市理論そのものではなく、一つの研究方法に過ぎない。しかも、基礎的ではあるが、しかし補助的な方法である。

ここで、次の問題を考える必要があるだろう。パークの人間生態学は、彼の都市認識の全体像の中でどのように位置づけられるのか。人間生態学的方法と社会心理学的的方法はどのように統合されるのか。community と society という二つの側面が、都市の全体構造の中でどのように総合的に把握されるのか。

5. 自然地域

パークは、自然地域 (natural area) の概念について、これが都市研究における準拠の枠組を構成し、統計的数字に新たな意味を与えることを主張している。⁴⁸また、ルイス・ワースは、人間生態学の研究が、自然地域の確定へと向けて方法的進歩をとげてきたと指摘している。⁴⁹自然地域は、理論的図式と経験的研究を連結する重要な媒介としての意義を持っていたと考えられる。それゆえ、自然地域の概念を通して、パークの都市理論の全体像の中で彼の図式と方法を再構成するという課題にアプローチしうるであろう。

パークによれば、都市社会は、より小さな community のモザイクとして作り上げられている。たとえば、中心商業地区、郊外住宅地、重工業地区、スラムなどが、モザイクの断片となっている。このような、モザイクとしての都市を構成する単位が、自然地域である。⁵⁰しかし、自然地域の明確な概念化はなされていない。また、自然地域を構成する一般的な要素についても触れられていない。⁵¹自然地域とは感覚的には明快だが、分析的・概念的には不明確な用語である。我々は、彼の断片的な記述から、次のようにとりあえず考えておきたい。自然地域とは、異質なる諸要素の複合体としての都市の中にあって、機能的・生態学的

・人口学的に明確な独自性を示している地域である。それゆえ、都市とは、生態学的視点からは、自然地域を単位とした組織体と見なすことができる。言いかえれば、自然地域とは、都市の組織・構造を具体的にとらえるための準拠点である。

それでは、自然地域はどのような特性を持っているのか。我々はここで、「自然的」という用語を検討してみたい。自然的という用語は、第一に、行政的・計画的という用語と対立した意味で使用されている。「それらの地域が『自然的』であるのは、それが設計によって作られたわけではないからであり、その示す秩序が計画の結果成立したわけではなく、都市的状况に内在する諸傾向が顕示したものだからである。都市計画は、これらの傾向をコントロールし、矯正しようとするが、常に失敗に終る。」⁴⁴ここでは、行政的実体に対して、自然史的過程の中から生まれる独自の実在としての都市というイメージが主張されている。第二には、これらの諸傾向が、自然的諸力によるものであること、特に人間的自然 (human nature) の所産であるということである。⁴⁵この場合、「自然的」とは地形的・地理的な意味あいでは使われているわけではないし、また生物学的な意味あいでも使用されていない。「自然的」という用語は、厳密な分析を必要とするが、ここでは次のようにまとめておけば良いだろう。都市は人間の歴史の中で現われ、その発達は一種の自然的過程であるかのような姿をとる。この自然とは人間の自然であり、社会的諸過程の総和がコントロール不可能な力としてとる姿である。すなわち、都市の生成・構造は、人間の社会的営為の中で、またこの営為の歴史の中で語られる必要があるということである。話を元に戻せば、自然的な地域は、都市地域内における人々の社会的過程の総和の結果として生まれるということになる。そして第三に、自然的とは、そこにおのずと生まれる相互依存関係を意味する。ここでは「自然的」とは「共生的」という用語と似た意味を持つ。すなわち、自然的な地域とは機能的な地域である。自然的な地域という単位は同時に機能的な単位としての役割を果たし、都市の内部に相互依存的な関係網を作り出す。都市は、ここに有機体としての性格を得る。都市成長のメカニズムは、多様な人々をその能力に応じて空間的に配分し、あらゆる人々にその持場を与えるという意味で「共生的」(相互依存的)な組織を作り上げるが、自然的な地域とはこのようなメカニズムの所産である。

自然的な地域とは行政的な都市概念に対立するものであり、一種の「自然的諸力」によって形成されたものである。この自然的諸力は人々をふるいわけ、大規模な相互依存のシステムを作り出す。この過程を、個体に則して見るならば、競争による分布ということになるだろう。このようにして自然的な地域が形成され、自然的な地域間に機能的な相互依存関係が作り出される。そして、都市は生態学的に組織としての性格を獲得する。ここで生態学的類推をさらに進めてゆくとすれば、共生とは個体間に結ばれる関係ではなく、種と種の間で結ばれる関係である。⁴⁶自然的な地域とは、一方で異質な他の地域との間に広義の意味での分業関係を形成すると同時に、他方で、同質の個体を集結し、そこに集団を形成する基盤を作るという機能を持つ。自然的な地域を構成している同質性は、この地域を同時に society として組織するための基盤ともなり得るのである。「あらゆる自然的な地域はそれ独自の伝統や習慣、慣習、洗練性の基盤、特性を持つ。そして、たとえ独自の言語を保有しなくても、同一の交話の宇宙 (a universe of discourse) を持つ。あるいは、それらのものを持つ傾向がある。」⁴⁷したがって、自然的な地域とは同時に文化的な地域である。すなわち、自然的な地域とは、特定の生活様式が制度化され、社会的・文化的同一性によって特徴づけられた地域でもある。都市とは、

自然的地域を基盤にした社会的・文化的組織体であることが明らかになったわけである。

それでは、何故、生態学的な原理が社会的・文化的な原理へと転化し得るのか。生態学的に形成された単位は同時に文化的・社会的単位となりうるのか。これについては、パークは明確な説明をしていない。我々は、一部は彼の記述の断片から、一部は我々自身の推測によって、両者をつなぐ輪をおぎなっておく必要があるだろう。まず、何が一群の人々を同一の自然的地域に集結させるのか。これについては、パークは二種類の原則を考えているように見られる。第一には、経済的・職業的な地位をあげることができる。経済上・職業上の同一性が人々を同一の場所に集結させる。彼らは、共通の生活様式を持っており、これが地域の文化的・社会的組織化の軸になる。言いかえるならば、階層形成・階級形成の原理が、自然的地域＝文化的地域を作り出すという説明である。これに対し、第二には、移民集団が示すパターンをこれとは区別してあげることができる。これは、同一の民族性、同一の言語などによって形成された同質的集団、すなわち自然集団⁹⁹が特定の地域に流入することによって自然地域を形成するという論理をたどる。彼らは、通常、推移地帯の内部に移民街という自然地域をまず作る。そして、一連の規則的な過程を経て全市域へと分布してゆく。これはアメリカ化の過程であると同時に、自然地域形成の第一パターンへと移行することを意味している。まとめるならば、自然地域および文化地域の形成は、階層および階級形成のパターンと、文化集団の移住および同化のパターン、この二つの過程が交錯することによって成立する。このような形成パターンは、一連の規則的な遷移の過程をたどる。¹⁰⁰しかし、ここでまとめたような定式化はまだ粗削りなものであり、都市社会の形式をめぐって経済原則と文化原則とがどのように交渉しあうのかという問題が残されているとよい。

都市の自然的地域は、都市社会という移動性の高い社会の中で人々を配分し結合するという機能を果たす。このような配分・結合の様式は、社会的・文化的な組織を生態学的組織へと転換し、また、生態学的組織を社会的・文化的組織へと転換する。このような相互転換によって都市は地域社会¹⁰¹として成立する。自然的地域とは、以上のような相互転換を可能にする装置である。

以上の考察は、自然地域が理論的・方法的に持っている意義を明らかにしてくれる。理論的には、自然地域とは、生態学的組織と社会的組織を結びつける媒介としての意義を持つ。自然地域を単位とすることによって、生態学的組織は社会的・文化的組織を解明するための重要な手段となり得るのである。方法的には、自然地域とは「生態学的方法」を「社会心理学的方法」へと結びつけるための媒体である。統計的方法は、自然的地域を客観的に同定するという機能を持つ。すなわち、生態学的諸変数に関して、他の単位とは極立った対照性を持つ諸単位を構成するという機能を、統計的方法は持つ。このようにして構成された生態学的単位は、社会的・文化的単位でもある。すなわち、生態学的に構成された自然地域は、同時に社会的・文化的世界でもある。物的装置と精神状態としての都市という問題意識は、ここに具体的な解き口を見出したと言ってもよいだろう。

6. 自然的過程としての都市

自然地域概念は、都市という混沌とした対象に、一定の秩序を発見するための装置という意義を持っていた。この秩序とは、都市の生態学的組織化であり、社会的組織化であり、

かつ同時に両者でもある。自然地域という媒体を通して、二つの組織化は相互転換的な意味を持ってくる。自然地域は、都市の成長・変動の中で形成されてくる。そして、常に再編成されてゆくという変化の過程の中にある。ここで、我々には次のような問題が残されている。都市は、自らのうちに多様な自然的地域を作り出し、人々をそこにふり分けると述べたが、それでは、どのような力がこのようなメカニズムを作り上げているのか。

この問題について、鍵となるのはひんばんに使われる「自然」という用語であるように思われる。都市は一種の「自然過程」によって生成し成長してゆく。都市は「自然史」を持つ。この「自然」という用語が、決して自然条件を意味するものでないことは、すでに見た通りである。この「自然」とは、人間が本来そなえている「自然」より発する力のことである。しかし、同時に人間のコントロールを越えた力のことである。それゆえ、我々の存在とはかけ離れた「自然の力」の如きものとして現出してくる。「自然史」とは、このような力の発現として見られた歴史である。すなわち、歴史を一連の出来事の連鎖として見るのではなく、一群の社会的諸力の合力の結果として見る視点のことである。自然史が歴史の推進力と見なすものは、人間より発し人間を越えた社会的諸力である。また、自然史が対象とするのは、個別的な出来事ではなく、一般的な傾向性である。それゆえ、自然史とは社会学的にとらえられた歴史に他ならない。⁵⁴

都市を自然史の中で一種の自然過程としてとらえるということは、都市を社会学固有の視角でとらえることを意味する。それでは、パークが研究の対象とした近代都市は自然史という視角からはどのように見ることができなのか。近代都市は、社会学的に見て、どのような条件の下に成立するのか。我々は、パークの記述から次の三つの条件を取り出すことが出来るだろう。第一に、近代の都市の発展をうながした要因は経済的なものである。古代の都市は政治都市として成立し、その政治的機能のゆえに支配力 (dominance) を及ぼしてきた。しかし、今日の都市の組織原理は経済的なものである。「少くとも、今日の世界を結びつけている諸力は、政治的なものではなくて経済的なものであるということは明白である。それらの力を列挙するならば、商業とコミュニケーション、銀行と新聞、金銭とニュースである。」⁵⁵ 第二に、このような都市成長は、都市を取りまく農村社会を犠牲にして行われる。すなわち、経済的な諸力が、従来の局地的な経済構造と文化構造を破壊し、同時に、都市的状况の下で再編成してゆく。第三に、このような過程は、全世界的な規模で行われる。すなわち、一方では、市場を絶えず拡大し、閉鎖的経済圏を破壊し、より大きな市場へと併合してゆくのだが、これは究極的には世界コミュニティへと向う。他方、文化の側面においては、破壊された局地的な文化は、世界規模の大都市的^{メトロポリタン}文化、すなわち文明へと再編されてゆく。このように、都市の問題とは、全世界的な規模で進行する都市化の問題なのであり、都市化過程の中で破壊され再構築されてゆく社会組織の問題なのである。

このような都市成長の過程は、パークによって次のようにまとめられている。⁵⁶

1. 都市は、世界中から多様な人々を集めてくる。彼らはその異質性が相互に有用性をもたらすが故に、都市に居場所を持つ。

2. このような異質な人々の間にくりひろげられる競争過程は、旧来の親族や文化集団を破壊し、彼らとその能力に最もふさわしい場所へと配分する。

3. このようにして分業は深化してゆく。分業組織は、各々の個人にその能力に最適な場所を与えるがゆえに、全体に対して多大な貢献をする。

4. このような諸過程は、伝統の絆から個人を解放する。ここに、新しい発明と業種のためにそのエネルギーを傾注する新しい人間類型が成立する。

5. 新しい人間、新しい環境の中で達成された発明や業績は、市場を通じて伝播される。これは地域の文化的特徴を標準化させ、局地的文化を、世界的規模の文明へと統合してゆく。

経済領域における市場の支配力の拡大、文化領域における文明の生成、この二つの側面において近代都市は我々の社会組織と生活様式を変容させてゆく。このようにして都市は実験室となる。伝統と慣習にもとづいた生活様式を破壊し、自らの手で自らの生活様式を作り上げることを余儀なくされるという意味で、都市は壮大な実験室なのである。⁴⁴ パークの描いた図式や、自然地域をはじめとする諸概念が意味をもってくるのは、「実験室としての都市」という構図の中においてである。

ここまで来て、我々は、生態学的類推が持っていた意義を理解することができる。近代都市の生成は、膨大な量の人口移動によって可能となった。そして、人口移動の結果は、人間社会の「生態学的」変化としてあらわれる。すなわち、都市社会の生成は一連の生態学的な変化のパターンとしてあらわれてくる。このような変動は、一連の非人格的な「自然的力」（すなわち社会力）によって生まれてく過程であるが、故に、一種の「自然法則」を持っている。このような自然法則をとらえるための装置として、生態学的類推は意味を持って来る。そして、人口移動は、社会学的には、人々の社会組織と生活様式を破壊するという意味を持つ。都市への流入・適応過程とは、社会組織と生活様式が解体し再構成されてゆく過程でもあった。一連の生態学的変化とは、このような解体・再構成の過程でもあった。こうして、生態学的な類推の下にとらえられた法則とは、同時に、社会組織・生活様式の解体・再編成の過程に関する認識ともなり得たのである。

このような問題把握・問題構成がどのような現実を背景としてなされたかについては、くわしく説明する必要はないだろう。ここでは、19世紀末から20世紀にかけてアメリカの社会が経験した大変動を、「都市化」という視点から考えればよいであろう。アメリカの都市化は次の三つの意味で急激なものであり、かつ大変動であった。第一に、伝統的な都市という基盤が存在しないところに、急速に大都市（metropolis）が形成されたこと。第二に、都市化とともに始めて国民社会らしきものが成立し、同時に、国民的規模で生活様式が都市化していったこと。第三に、人口移動のかなりの割合を移民が占めており、しかも、19世紀のおわりの頃を境として、移民の供給圏が従来の西欧・北欧から文化的背景の異なる東欧・南欧へと転換していったこと。それ故、アメリカの大都市とは、この時期、社会的・文化的なカオスであった。そして、アメリカの大都市の中でも、このような都市膨張とそれによって引き起こされてくる都市問題をもっとも鋭い形で体現したのがシカゴであった。⁴⁵ シカゴこそどこよりも「実験室」にふさわしい場であったのである。

パークをリーダーとするシカゴ学派の都市研究は、以上のような構図の中で理解されるべきである。彼らの研究対象は都市という実在であるというよりは、生成しつつありかつ変化の過程の中にある都市という現象であった。解体しつつあり同時に再編成されつつある都市という社会組織、同時に、その中で解体と再組織化の過程をたどりつつある人々の生活様式、これが彼らにとっての社会学的都市研究の対象なのであった。J. T. ケアリーは、シカゴ学派の研究者たちが共通に抱いていた問題枠組を「社会解体パラダイム」と呼んでいるが、⁴⁶ これは妥当な見解であろう。彼らの近代都市に対する認識、そして経験的調査は、根本的には

社会解体という観点からなされていたと考えてよい。人間生態学とは社会解体とともに進行する都市成長の中で、社会の組織化が再びどのように進行してゆくのかを測定するための装置なのであった。

註

- (1) それゆえ、今日では、シカゴ学派自体が社会学的研究の対象となっている。たとえば Anthony Obershall, "The Institutionalization of American Sociology" in Obershall (ed.), *The Establishment of Empirical Sociology* (1972, Harper & Row), James T. Carey, *Sociology and Public Affairs* (1975, Sage) はその一例である。
- (2) 人間生態学の理論内容に関して、専門家の間でもどの程度の意見の一致が存在するかは疑わしい。しかし、クインが述べているように、一連の参与観察的な調査を人間生態学に含めるのはやはり無理であろう。James A. Quinn, *Human Ecology* (1950, Prentice-Hall) p.9 なお、そのような調査を「都市民俗誌」としてとらえる見方もある。G. D. Suttles, "Urban Ethnography: Situational and Normative Accounts" *Annual Review of Sociology* vol. 2 (1976) pp. 1-18
- (3) この二つの用語は、きわめて特殊な意味で使われている。それ故、パークの二分法図式で使われている意味に限定される限りで、community と society という表記をしておく。
- (4) L. ライスマン『新しい都市理論』(1968, 鹿島出版会) p.113
- (5) *AJS* vol. 20 pp. 577-612, ただし引用は彼の論文集 *Human Communities* (1952, Free Press) による。(p.13)
- (6) パージェスによれば、この二つの対立という図式は1921年にはじめて生まれた。M. A. Alihan, *Social Ecology* (1938, Columbia U.P.) p.11
- (7) R. E. Park & E. W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology* (1921, The Univ. of Chicago Press)
- (8) *ibid.*, p.161
- (9) *ibid.*, p.161
- (10) たとえば, *ibid.*, pp.163-164
- (11) R. E. Park, "Sociology, Community and Society" (1929) in *Human Communities*
- (12) E. W. Burgess, "The Determination of Gradients in the Growth of the City," *Publication of the American Sociological Society* vol. 21 (1927) この論文は、彼の同心円仮説を立証するという意義を持っている。なお、「傾度」の導入は、パージェスが述べているように、パークの示唆によるものである。
- (13) R. E. Park, "Human Ecology" (1936) in *Human Communities* p.151
- (14) "Sociology, Community and Society", "Human Ecology", "Symbiosis and Socialization" (1939) などによる。
- (15) "Sociology, Community and Society" p.181
- (16) *ibid.*, p.182
- (17) *ibid.*, p.182
- (18) Alihan, *Social Ecology* chap. 2を参照。
- (19) Park et al., *The City* (1925, The Univ. of Chicago Press) におさめられたパークの諸論文には特にこの傾向が強い。
- (20) 例えば Park & Burgess, *Introduction* pp.509-510
- (21) "Succession, an Ecological Concept" (1936), in *Human Communities* p.228

- 22) "Human Ecology" p.154 『内』内はH.G. ウェルズよりの引用。
- 23) "Symbiosis and Socialization" (1939) in *Human Communities* p.242
- 24) ライスマン『新しい都市理論』pp.113-4.
- 25) これは人間生態学者 Hawley の見解でもある。A.H. Hawley, "Ecology; Human Ecology" *International Encyclopedia of the Social Sciences* vol. 4 (1968, Macmilan)
- 26) たとえば、パークは、地理学においては、時間・空間に加えて地価が第三の次元を構成すると述べている。("Sociology, Community and Society" p.192)
- 27) Walter Firey, *Land Use in Central Boston* (1947, Harvard U.P.)
- 28) ここでは触れられなかったが、四重図式も、その発展の前段階として三重図式(生態学的組織, 経済組織, 文化組織)を持っている。("Community Organization and the Romantic Temper" (1925), その他) なお、この他に、社会的秩序を経済的均衡, 政治秩序, 社会組織, パーソナリティと文化, の四つに分類する考え方も提出している。(Park & Burgess, *Introduction* Chap. 8)
- 29) Park & Burgess, *Introduction* pp.510-511
- 30) "Community Organization and the Romantic Temper" in *Human Communities* p.66
- 31) "Sociology," p.182
- 32) パーク自身も二通りの定式化を行っている。"The City" と "Human Ecology" における二つの定義を参照の事。
- 33) Walter Firey, "Sentiment and Symbolism as Ecological Variable" *ASR* vol. 10 (1945) p.140
- 34) *ibid.*, p.140
- 35) "The Urban Community as Spacial Pattern and Moral Order" (1925) in *Human Communities*
- 36) *ibid.*, pp.173-4
- 37) パークの思想形成における デューイ の影響力については、Fred H. Matthews, *Quest for an American Sociology* (1977, McGill-Queen U. P.) chap. 1 を参照。
- 38) *Human Communities* p.157, p.244
- 39) E. W. Burgess, "The Growth of the City" in Park et al., *The City* および、その改訂版 "Urban Areas" in T.V. Smith & L.D. White (ed.), *Chicago: An Experiment in Social Science Research* (1929, The Univ. of Chicago Press)
- 40) Louis Wirth & Margaret Furez (eds.), *Local Community Fact Book* (1938) をはじめとして、センサスのたびごとに数冊出版されている。
- 41) Matthews, *Quest* p.102, J. T. Carey, *Sociology & Public Affairs* p.186
- 42) 代表的なものとして、Nels Anderson, *The Hobo* (1923), N.W. Zorbaugh, *The Gold Coast and the Slum* (1929) などがある。
- 43) William Issac Thomas & Florian Znaniecki, *Polish Peasant* 4 vols (1918-20)
- 44) "Sociology," p.198
- 45) Louis Wirth, "Human Ecology" *AJS* vol. 50 (1945) p.485
- 46) "Sociology," p.196
- 47) この用語についても、厳密に定義されないために、人間生態学者の間に、不一致や混乱がみられる。J.A. Quinn, *Human Ecology* (1950. Prentice-Hall), A.H. Hawley, *Human Ecology* (1950, Ronald Press) の定義を参照のこと。
- 48) "Sociology," p.196
- 49) "The City as Social Laboratory" (1929) in *Human Communities*
- 50) Alihan, *Social Ecology* pp.41-44 を参照。なお、Hawley は、同種個体間の「共生」を

commensalism, 種と種の「共生」を symbiosis と区別している。("Ecology; Human Ecology" p. 324)

61) "Sociology, ……." p. 201

62) "The Urban Community……" p. 172

63) P.F. Cressey, "Population Succession in Chicago, 1898—1930" *AJS* vol. 44 (1938)

64) Park & Burgess, *Introduction* pp. 16-17

65) "The City and Civilization" (1936) in *Human Communities* p. 135

66) *ibid.*, pp. 140-141

67) "The City as a Social Laboratory" p. 73

68) 1833年に400人ほどの人口規模で出発したシカゴの町は、1890年には100万を越える大都市に成長した。そして1900年にはニューヨークに次ぐアメリカ第二の都市となっている。シカゴの都市成長がいかにすさまじいものであったかがわかるだろう。

69) Carey, *Sociology and Public Affairs* chap. 4 を参照。Carey も指摘しているように「社会解体 (Social Disorganization)」という用語は必ずしも社会病理学的に理解されるべきではない。トマスによれば「我々がここで使用するつもりの社会解体の概念は……第一義的には制度について述べるものであり、人については第二義的であるにすぎない。」(W. I. Thomas, *Social Behavior and Personality* 1951, Social Science Research Council, p. 233) 社会解体とは「行動に関する規存の社会的規則が集団の個々のメンバーに及ぼす影響力が低下すること」(p. 234)である。それゆえ、解体は同時に新しい制度・組織の生成という可能性をも秘めている。